

# IV-412

## 地名で見る六郷堀・七郷堀の役割

東北大学工学部 正会員 ○小林眞勝  
東北大学情報科学研究科 正会員 稲村 肇

### 1. 背景と目的

仙台市の西部を流れる広瀬川があり、その南東に旧愛宕橋がある。この橋から左岸を260m程下った所に堰<sup>1)</sup>が見える。この堰から六郷堀・七郷堀の用水が取水されている。藩政時代には堰が二カ所あり各堀に清水が流れ込み情緒ある水辺空間を形成していた。現在はその面影も薄れ、市民との関わりも希薄な状況下にある。

仙台北下町は慶長6年(1601)から延宝年間(1673-80)に城下町はほぼ完成を見て、絵図には仙台北大用水の四ッ谷用水・六郷堀・七郷堀が描かれている。各々の灌漑用水から耕地面積、約3100町歩で石高約3万5千余石<sup>2)</sup>であった。三用水の内、六郷堀・七郷堀についての研究は少ない。取水口界限には地名が河原町・舟丁・穀町・南材木町・南染師町に残っている。

本研究は界限に残る地名と「六郷堀」「七郷堀」との役割を考証することを目的とする。

### 2. 城下町形成と六郷堀・七郷堀の役割

城下町建設は谷地湿地帯の排水の目的で「孫兵衛堀」を開削し、城下町を主にした「四ッ谷用水」が元和～寛永に開削、それらの更に外廻りの排水を目的に初期の「七郷堀」が開削された。藩祖政宗公が還暦を期して城下の南東に若林城(隠居館・現宮城刑務所)を寛永4～5年(1627-28)に構築した。その城濠(外堀・内堀)に六郷堀が利用されたと謂われる。同時に若林城下町が荒町を核として河原町まで形成した。若林城廃城と共にこの城下町の活気が失ってしまったが取水口の舟溜まりを核とした水運と奥州街道の道筋であったことも幸いして、この界限は物流町として独自の発展を示し命脈を保たれた。

### 3. 六郷堀・七郷堀の役割

六郷堀は六郷地区(沖野・飯田・日辺・今泉・種次・二木)六ヶ村の用水で石高8千960石を産み七郷堀は七郷地区(霞の目・長喜城・蒲ノ町・伊在・六丁ノ目・荒井・荒浜)の七ヶ村の用水で石高2万160石が収穫された。図-1は著者が史

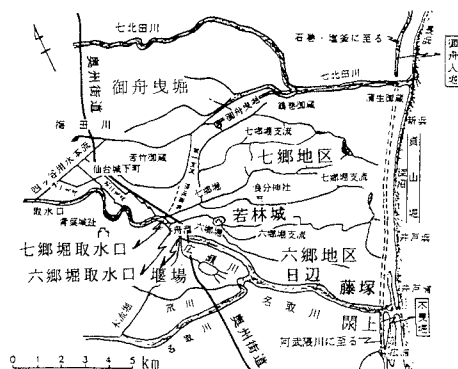


図-1 仙台北下町と水のネットワーク

実、水路図、現地踏査により作成した。図から見る様に四ッ谷用水・七郷堀・六郷堀の取水場所を示す。図-2は仙台北下絵図最古絵図(正保2-3年(1645-46))で取水口付近の拡大図で二つの堀筋があるが名称はない。通説では北側の堀は孫兵衛堀、南は七郷堀と称されている。二番目に古い寛文4年(1664)の絵図に露見する用水路が六郷堀が初見であると称されている。

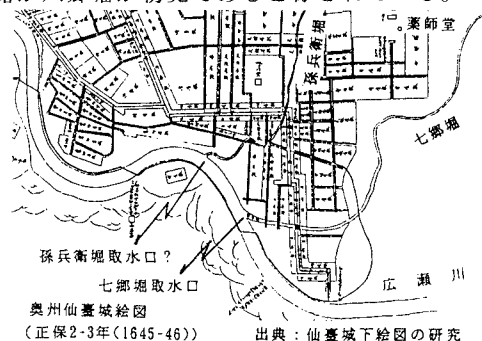


図-2 開府から44～45年後頃の絵図

### 4. 取水口(堰場)界限に残る地名

#### 4-1. 堰場(どうば)が舟着場

図-3は堰場付近の地名を示す。堰場とは広瀬川の流れを堰止めて用水と水運に利用し、六郷堀と七郷堀とに囲まれた所に因む。当時の諸藩の物資輸送は水運が主体であった。初期の仙台北下町の水運についての資料は少ない。

ここが舟運の集積地であったことを裏付けるものに、政宗黒印状<sup>3)</sup>(慶長18年9月、伝馬墨付

け)材木を何日に城下まで運べと命令書を出している。その舟の立ち寄った舟着場の名が明記。又、昔の「手まり唄」には「あれは流れのどこの舟 あれは角田のみやげ舟 (中略) 鐘をたたいて長者とならば 南鍛冶町みな長者みな長者 (以下省略)」<sup>4)</sup>と、これは南鍛冶町と角田(阿武隈川上流の町)との関連を示し、角田から阿武隈川を下り河口の荒浜から木曳堀(後の貞山堀)を通して関上に出て名取川河口から広瀬川の流れを遡り堰場へと舟で往来した事が分かる。米・穀物等の物資を舟衆が堰場まで舟で運んだ。舟丁は舟衆が住居していたことによる。

そして堰場には藩の若林御米蔵(三間に三十間・一棟、三間に二十間・五棟、一万石の御年貢米を収容)や御材木蔵などが置かれた。水量不足の時は城下に最も近い藤塚・日辺で陸上げして馬の背鞍で堰場の蔵・各町に運ばれた。寛文期の幕府の東廻り航路と藩独自で開発した新水運路と相まって、次第にその水運が主体となり名取・広瀬川水運の役目は終わる。

#### 4-2. 荒町と奥州街道

荒町は藩直轄の御譜代町(六ヶ町)の一つで、若林城建築に伴い奥州街道沿道の南方地域経営の為に旧城下から移転し草業の地を拓いた<sup>5)</sup>。この町を伊達家をはじめ一関、南部の諸侯が江戸参勤交代で通行した、これに旅人が往来し大変な賑わいを見せた。荒町には特権として「麴の権利金をとる」があった。それで麴に関係する商人が店(酒屋、桶屋等)を構えた。又、城下防御の為に寺院を適度に配置し、道路はカギ型に折れ曲がった「筋違い」を設けられていた。

#### 4-3. 南材木町・穀町・河原町

この町等は舟運と何らかの関わりを持っていた。南材木町は広瀬川から陸上げされた材木を商う関連業者(木挽屋・大工細工)の人々が住まいしていたのに因む。穀町は米国売買の特権を許され穀問屋が置かれたことに因む。河原町は河原に割り付けられたことによる。ここに旧来の城下各町から菓種や繰綿を業とする商人が移転し、近郊の百姓達が野菜類を売りに来て、自然とここに青果市場を開かれ活気で溢れていた。舟運や商売で財を成した人達がここに定住した。

#### 4-4. 南染師町と七郷堀

南染師町は七郷堀と大きく関係を持った。この町は寛永13年(1636)に御霊屋建設の時にこの地(元色町の小保町)に移った。伊達藩のお抱え職人として供に歩んで来た。当時の染師は六軒で清流の七郷堀沿いに堀を挟んで店を並べた。各屋敷は干場を要するため、他の町屋数間口六間なのに対して、六間半の間口を与えられていた。主として木綿で足軽の脚絆類を扱い繁盛していた。漸次同業を営むものが増えた。この七郷堀は良質の水に恵まれ染洗に適していた。

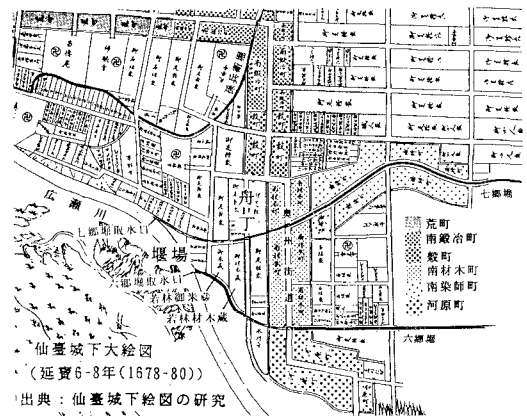


図-3 開府から77~79年後頃の絵図

#### 5. まとめ

仙台城下町に於いて広瀬川利用の水運が確認出来た。堰場が仙台城下町建設期の仙台藩の外港として活躍し、寛文期に東廻り航路が確立されるまで水運路として活躍したこと。若林城の建設に伴い新たな町造りが行われ波及効果として各種商工が発達したこと。「六郷堀・七郷堀」は六郷・七郷地区の灌漑用水にと特に、七郷堀は染師職人の命の堀であることが分かった。

- 注) 1)「愛宕堰」昭和29年に取水口を一つにした  
2) 10町歩=約112石に換算 3) 伊達政宗黒印状「大日本古文書 伊達家文書」765号  
4) 関上風土記(p13. 1977. 11)  
5) 宮城の郷土史話 三原良吉著(p267 1976)

参考文献) 1)「仙台城下絵図の研究」(1936)阿刀田合造著 2)絵図・地図で見る仙台(1994)高倉淳・外著 3)続「もう一つの広瀬川」(1994)佐藤昭典著 4)宮城県史(1960)-5 5)宮城県郷土史年表(1972)菊池勝之助著 6)宮城県の地名(1987) 7)仙台地名考(1978)菊池勝之助著 8)まち一河原町(その歴史と街なみ)(1984) 9)仙台あちらこちら(1982)佐々久著 10)藩政時代に於ける仙台の御米蔵(下)(1937)練生川信次著 11)仙台・水の文化史研究会・資料(1995)荒木茂郎氏 12)市史せんだいvol.4 1994.6